NO.イ D01 物的・人的支援からみる肢体障害をもつ親の子育ての実態

井澤研究室（インテリア・プロダクト分野）　A18AB087 築島萌香

Ⅰ.序章

1.研究の目的・背景　肢体障害を持つ知人が現在子育てをしていると知り、興味を持った。そこで本研究は、肢体に障害を抱えながら子育てをする母親への調査を通し、物的支援と人的支援の両視点から子育ての実態を明らかにすることを目的とする。

2.研究の位置付け　妊娠、出産、子育てについての研究は、子育て支援とそれを取り巻く社会に視点を置いたもの[1)]、その中でも障害を持つ子どもを育てることについては、発達障害児を持つ母親の支援をする人について論じたもの[2)]などがみられた。しかし、障害のある人が子どもを育てるという内容のもの[3)]は多くみられなかった。

Ⅱ.障害者を取り巻く環境

1.法律の変化　障害者に関する法律は障害種別の対象を広げる、施設ではなく自立を目指すなど大きく変わり、法改正に伴い、障害者の人権(結婚、子育て、就労など)が保障されるようになった。

2.自由度の変化　就職や結婚、出産などに対して寛容になってきているような障害者にとってプラスの方向に変化があることがわかる。

Ⅲ.調査概要

1.目的　肢体障害者が利用している育児用品や空間のこと、子育てへの手助けや妊娠から子育てに至る気持ちの変化などを抽出する。

2.方法　5 人の対象者(表 1)それぞれにインタビュー調査を行い、本人の承諾を得て録音した。調査期間は 2021 年 5 月 10 日～7 月 26 日、インタビュー内容はインタビュー対象者の障害の種類、本人と子どもの年齢、1 日のタイムスケジュールについて、一緒に子育てをする人、支援をする人について、妊娠・出産・子育てを通して苦労したこと、育児用品、利用する空間、行う動作について、これまでを振り返ってである。

3.倫理的配慮　調査で得た情報については、個人情報が特定されることのないように記号に置き換えて処理し、厳重に管理した。

4.対象施設・対象者　はじめに本研究のきっかけにもなった知人である A さんに対して試験的に、その後 B さん～E さんについては N 市社協にてインタビューを行った。それぞれの属性は表 1 の通りであり、障害の種類や一緒に子育てをする人などに違いがあることがわかる。なお、子どもの人数は全員 1 名である。

表 1.インタビュー対象者

	性別	年齢	障害の種別	障害者手帳	子どもの年齢	一緒に子育てをする人
A	女	30代	先天的な四肢欠損症	1級	11か月	夫、ヘルパー(2人)
B	女	40代	先天的な上腕型筋ジストロフィー	1級	3歳半	夫、両親
C	女	40代	先天性二分脊椎症	2級	小3	夫
D	女	30代	先天的な脳性まひ	1級	小3	(ひとり親)
E	女	50代	怪我による反射性交感神経ジストロフィー	2級	小5	夫、ヘルパー、夫の両親

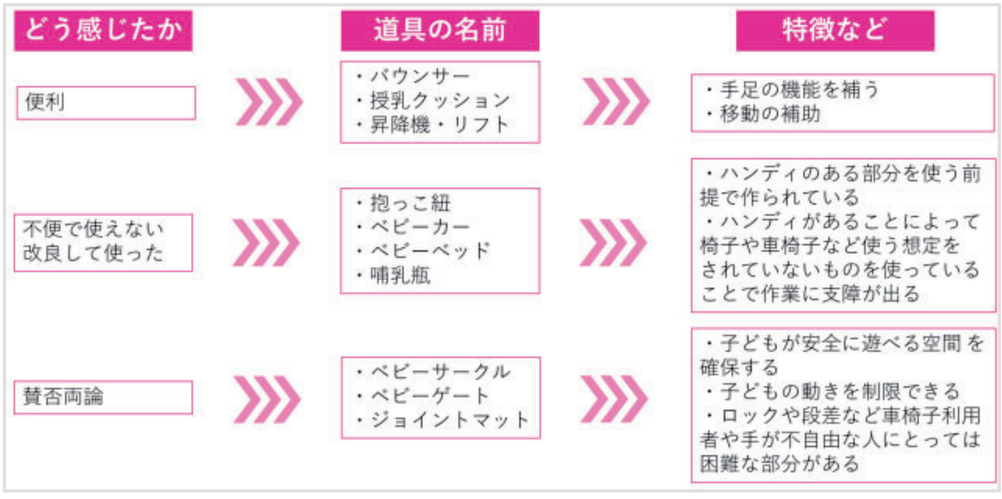

図 1. 育児用品の使い勝手

図 2.家の中の利便性

図 3.外出先での利便性

5.しゃべり場について　対象者が参加しているしゃべり場は、肢体障害者の子育てを支援するため、気軽に集まれ、おしゃべりできる交流できる場を実施している。インタビュー対象者の B さん～E さんは、N 市社協にて開催されたこのイベントに参加した際に協力を得られた方々である。

6.分析方法　インタビュー内容をすべて筆者が文字に起こし、類似した発言をグルーピングした。

Ⅳ.インタビューに基づく調査分析結果

1.育児用品の使い勝手　育児用品には、肢体障害のある人専用のものを使用している対象者はなく、一般的な製品の中から使いやすいものを検討して買うというのが現状であった。そのため、使いやすいものがある一方で、独自使い方の工夫や、もの自体の改良をすることがあったり、試行錯誤をしても使うことが難しかったりということが起きるとわかった(図 1)。

2.自宅内と外出先での利便性

2-1.自宅内　自分が普段暮らす場所として作っているため、あまり不便だと感じる点は挙がらなかった。また、自宅改修は 5 人の対象者の内 1 人のみが行っており、ほとんどの人は這う、車椅子を利用するといったように改修せずに工夫して過ごしていた。そういった障害の程度によるライフスタイルの違いによって家の暮らしやすさも変わってくることがわかった(図 2)。

2-2.外出先　病院は入院・通院とも多く挙がり、施設規模にもよる違いはあるが、動きづらさが顕著であった。公園については、立ち入ることができない場所が存在する場合、ママ友などの助けを借り、工夫して利用していた。一方、保育園や児童館では職員の手を借りればちょっとした段差程度は問題ないことがわかった。しかし、本来であればすることのない介助をさせてしまうことに申し訳ない気持ちになるという悩みもあることがわかった(図 3)。

3.子育ての自立度　育児行動について「一人でできる」「障害の程度によって分かれる」「育児用品や他者のサポートが必要」に分けて整理した。障害の程度によって顕著に分かれたのは調理であったが、授乳は腕を使わない場合できるということで、そのときの体勢によっても変わってくるという結果になった。道具を使っても動作の補助にならないことは他の人に任せているということで自立して行うことができないとわかった(図 4)。

4.妊娠から子育てに至る気持ちの変化　妊娠前は障害を理由とした、子どもをもつことに対しての諦めや、障害者の親をもつことによる子どもへの影響についての不安があった。出産時は障害の進行に不安を抱きつつも、周囲のサポートに対する感謝や、子どもをもつことができた喜びを感じていた。子育て期では、子どもと過ごすことで生活にハリが出る、自分も成長できると感じていた。一方、子どもの成長に反して、思うように自分の身体を動かせないもどかしさや、周囲のサポート不足が明らかになった。加えて、仕事と子育ての両立といった障害の有無に関わらない、普遍的な課題があることがわかった。（図 5・6)。

図 4.　子育ての自立

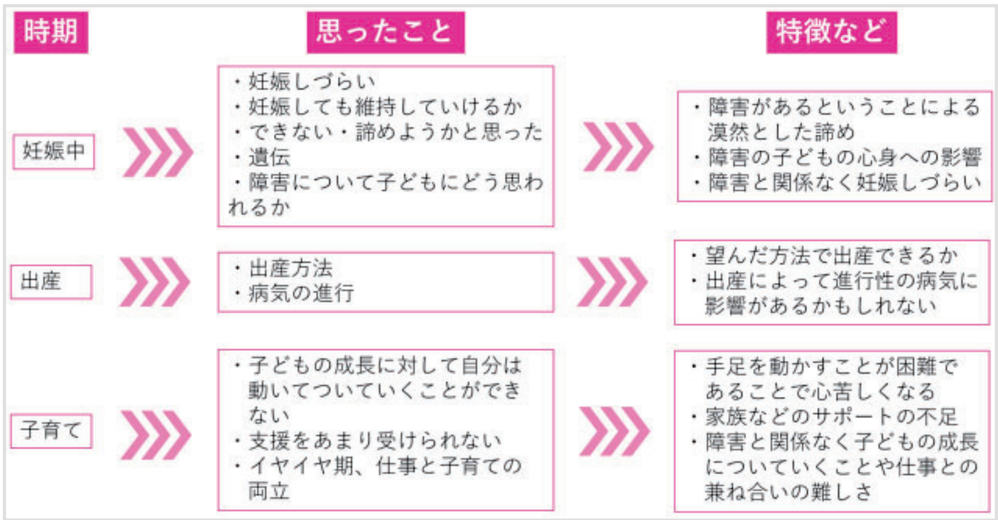

図 5.妊娠から子育てに至る不安感

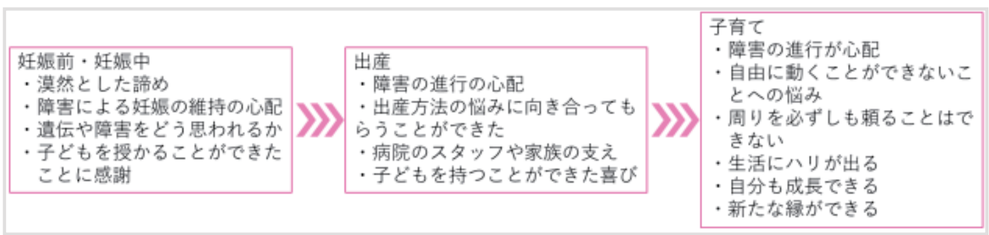

図 6. 妊娠から子育てに至る気持ちの変化

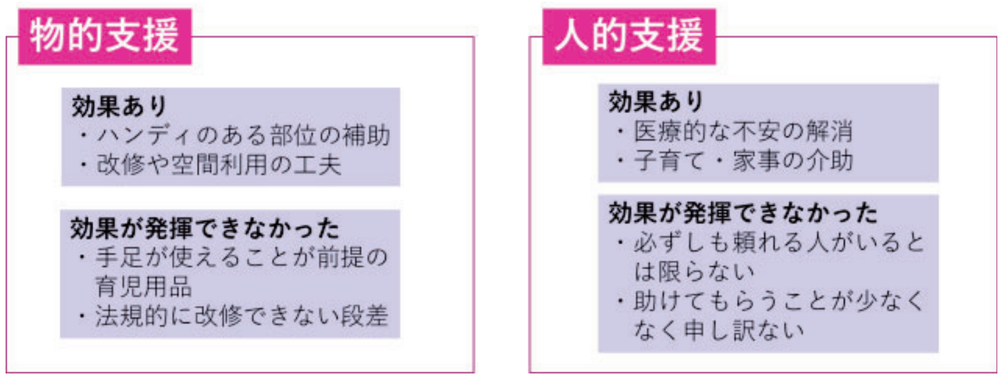

図 7. 肢体障害をもつ親への子育てに関する物的・人的支援

Ⅴ.結論

本論より、以下のことが明らかになった。物的にはハンディのある部位の機能を補う育児用品や改修、空間利用の工夫が行われていた。人的には妊娠から子育てまでにぶつかる困難や障害があることにより、より大きくなる不安の解消、物的に補いきることのできない負担の介助がなされていた。よって、二つの面での支援がみられることがわかった(図 7)。

Ⅵ.参考文献

1)久保田健一郎：子育て支援における社会関係資本に関する研究　国際研究論叢 ： 大阪国際大学紀要 35(1)，85-101，2021-10-31

2)藤田久美 発達障害児の母親と共に創る子育てコミュニティの創造 ：ペアレントメンター養成にかかわる実践をもとに 山口県立大学学術情報(12)，75-81，2019-03-29

3)道木恭子 女性脊髄障害者の妊娠・出産・育児（特集 脊髄損傷--社会生活上の課題） 総合リハビリテ-ション 39(7)，639-642，2011-07